

障害児・者をもつ母親の育児ストレスと 自己効力感との関連性

The Relationship between parenting stress in mothers with children with disabilities and self-efficacy

釘宮 悦子 (Etsuko Kugimiya) 指導：佐々木 和義

【問題と目的】

障害のある子どもの親のストレスには、一般的な子育てのストレスに、障害の受け入れ、周囲の理解の得られなさ、特別な支援を受けることの難しさなど、多くのストレスがかかってくるという背景にある（伊藤, 2006）。また、障害児をもつ母親は健常児を育てるよりも育児ストレスが高いことが明らかになっている（田中, 1996; 河野, 2005）。

母親の育児ストレスに対する支援対策をより強化するには、母親個人の自己効力感を高める介入が重要である（渡辺・石井, 2009）。目下・久保（2011）は、幼児を育てている母親のストレス・プロセスにおいて、自己効力感を高めることがストレス反応軽減には効果があることを明らかにしている。このように、自己効力感の高さが育児ストレスに影響を及ぼすことが示されてきた。しかしながら、障害児・者の母親においては、この自己効力感の高さが育児ストレスに直接影響を及ぼしているとは考えられにくい。

そこで本研究は、自己効力感と育児ストレスとの関連性について、障害児・者をもつ母親に検討する。検証することで、子育て支援としてストレスの軽減に向けた方向性を示すことが期待できる。

【方法】

調査対象：障害児・者をもつ20歳～50歳代の母親67名

調査時期：2014年9月23日～2014年11月22日

調査材料：①フェースシート（調査対象者の年齢、家族構成、障害児以外の子どもの人数、障害児の年齢、障害名、障害の程度）②育児不安尺度22項目（手島ら, 2003）③一般性セルフ・エフィカシー尺度16項目（坂野・東篠, 1986）

調査手続き：質問紙調査。社会福祉法人の発達支援室に来所する母親に配布。回答を得た用紙を封筒に入れて密封し、支援室の職員を介して回収を行った。

倫理的配慮：早稲田大学人を対象とする研究に関する倫理委員会の承認を得て実施した（申請番号2014-134）。

【結果と考察】

属性による育児ストレスと自己効力感の得点の相違について、6つの属性をそれぞれ独立変数にし、育児ストレス、自己効力感を従属変数とした1要因の分散分析を行った。

その結果、自己効力感に有意な差は見られなく、障害の程度の4グループ間に、育児ストレスに有意な差が見られた（ $F(4, 62) = 3.09, p < .05$ ）。TukeyのHSD法による多重比較を行った結果、育児ストレスは、障害の程度を示す愛の手帳3度（中度）と愛の手帳なしの間の差が、5%水準で有意であった。次に、自己効力感の高低群による育児ストレスに差がないかt検定を行った結果、有意な差は見られなかった（ $t(65) = 1.923, .059, n.s.$ ）。障害児をもつ母親の育児ストレスは、一般性自己効力感の高さに関係ないことが示された。母親の育児経験と育児ストレス、自己効力感との関係についてt検定を行った結果、有意差は見られなかった（それぞれ $t(65) = 1.42, n.s.$; $t(65) = .54, n.s.$ ）。障害児をもつ母親に関しては、子育ての経験があっても、予測が出来ない障害児の行動や、発達の遅れから、経験豊富な育児が生かされないと考えられる。また、障害児の年齢を、3つの群に分けて分散分析を行った結果、育児ストレスおよび自己効力感ともに、障害児の年齢による有意差は見られなかった（それぞれ $F(2, 64) = 0.45, n.s.$; $F(2, 64) = 0.40, n.s.$ ）。これらのことより、自己効力感の高さや属性にかかわらず支援していくことが大事だと考えられる。

次に、育児ストレスと自己効力感尺度の因子構成について、主因子法、バリマックス解による因子分析を行った。その結果、5因子（負荷量が0.4以上、累積寄与率61.62%）と3因子（負荷量が0.4以上、累積寄与率50.78%）がそれぞれ抽出された。自己効力感が育児ストレスに及ぼす影響について、育児ストレスの下位因子である、育児不安、時間的拘束、発育の心配、育児への負担感、否定的感情の各因子を従属変数、自己効力感の下位因子である、楽観的思考、積極的姿勢、活動的社会性を独立変数とし、重回帰分析を行い検討した。その結果、育児不安と育児への負担感の重回帰決定係数は有意であった（それぞれ $R^2 = .20, p < .01$; $R^2 = .12, p < .05$ ）。また、楽観的思考が育児不安や育児への負担感に影響を及ぼすことが示された。障害児をもつ母親の育児には、育児がうまくいかななくてもあたりまえと思えるような肯定的な考えを高めることが、育児ストレスには有効であると考えられる。